小学校英語

中学校英語につなぐ「読むこと」の土台を作る「やり取り」の指導

中部学院大学 准教授
新井 謙司

目次

2 1 はじめに
～中学校の英語学習に繋げる小学校英語のポイント～
4 2 前後とつながる単位時間の授業づくり
14 3 地域で採択された小学校用教科書の特徴
～参考例：啓林館 Blue Skyの特徴～

知が啓く。
啓林館

1 はじめに

中学校の英語学習に繋げる小学校英語のポイント

1.1 学習指導要領の進化とそのねらい

学習指導要領の完全実施がスタートして２年目に入りました。各地域において選定された教科書やさまざまな副教材を活用しながら，日々の実践が営まれています。子どもたちの学ぶ姿のなかに，英語学習への興味・関心，意欲，そして，５領域（聞くこと・読むこと・話すこと［やり取り・発表］・書くこと）の英語の力への自信度が現れはじめているでしょうか。ここで，学習指導要領で提示されている内容の中でも，特に今後，小学校と中学校の英語学習のつながりを考えたときに，より重要度が増すのではないかと考えられる領域「読むこと」について取り上げてみたいと思います。

以前の小学校課程の学習指導要領では，「聞くこと」・「話すこと」の２領域，中学校課程の学習指導要領では，「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」の４領域でした。しかし，現行の学習指導要領の外国語では，小学校も中学校も「聞くこと・読むこと・話すこと［やり取り・発表］・書くこと」の５領域が示されました。ここで注目したいのは，「読むこと」が「聞くこと」の後に位置付けられたことです。これは何を意味しているのでしょうか。単に掲載順が変わったのではなく，文字を「読むこと」による英語学習の深まり，つまり，英語の音のインプットの充実，そして，読めることで得られる，後のさまざまな英語学習への効果を期待していると考えられます。図１で見られるように，小学校段階では，標準的な音に慣れ親しみながら，その音を頼りに，活字化された単語・句・文を音声化する，つまり，「読もうとする」力をつける機会と時間を十分に確保することが大切です。英語を聞いたり文字を見たりしながら情報を受け取る力を育むことは，「話すこと」「書くこと」の発信力につながります。

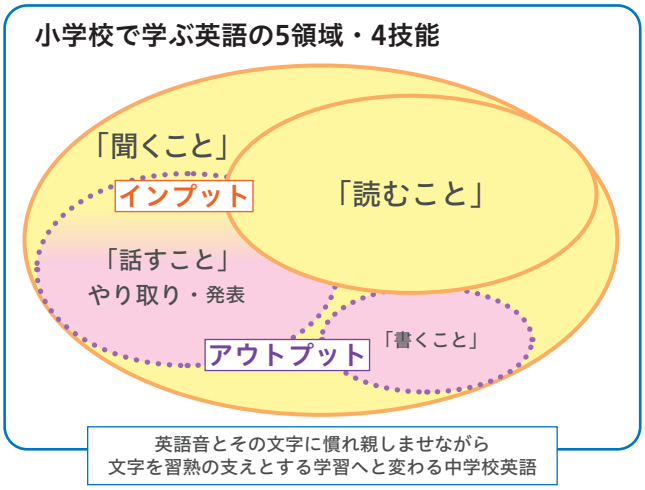


図1　小学校外国語の５領域の位置付け

子どもが「英語の文字（単語・句・文）を読みたい」と思うようになるためには，まず，正しい「音」を聞き取り，その音と文字に着目させます。例えば，flower の頭音 f の音とその文字の関係に気付くためには，さまざまな場面で fly，flag，fish，friend 等の正しい音を聞いてまねると同時に，文字も一緒に見えるようにしておくと，文字を見ながら音を聞いていくうちに音と文字との関係に気づきが生まれてきます。この時点では，f が前歯と下唇の間から勢いよく息を出す音という意識は希薄かもしれません。しかし，学習を重ねる間に徐々に flower の f は「フ」ではないという気づきが深まります。そして，他の子音の音にも注意するようになり，文字と音への注意力が育ってきます。次第に，既に知っている単語のそれぞれの文字がもつ音を注意し，正しい音と文字をつなぎ合わせて，比べながら読もうとするようにもなると考えています。このような「音と文字」の関係についての認識力が高まることは，単語や文を読んでいくときに重要な基盤となることは多くの研究者がすでに述べています。

学習指導要領において，「読むこと」が「聞くこと」の後に位置付いていることは，文字を介して，正しい音や英語らしいリズムに慣れ親しみ，文字を読むことからも豊かなインプットを受け，より音に対する感度を高めていくことを意味していると考えます。そして，正しい音で「話したり」，音とつづりをつなぎ合わせながら「書いたり」する学習活動にも密接につながっていくことを示唆しているのです。

1.2 子どもの「読む力」を育むための学習指導例

前述のように，子どもたちの「読む力」を育むためには，「音」への意識を高め，「音と文字」の関係についての認識力を高めていくことが大切です。小学生は「文字を読んでみたい」という好奇心が高まっていく時でもありますが，自然に音韻認識を高め文字を読んだりするようにはならないと言われています。つまり，文字認識を高めるための「学び」，そして，自分が言いたい，読んでみたいと心の中で思っている英文を見ることが無ければ，子どもは文字を自分に近づけようとはしないということです。では，一体どのようにして，子どもたちが文字認識を高めたり，文字を読もうとしたりしていくのでしょうか。「教科書の言語活動もあり，ペア活動も入れたい，振り返りの時間も必要だ」と考えると45 分の授業内には，これ以上追加して新たな学習内容を盛り込む事なんてできないのではないかと思われる先生も多いのではないでしょうか。もちろん，何かを優先すれば，何かを取捨選択しなければいけないことは当然ですが，これまでの指導方法の中に，これまで指導者も子どもたちも，あまり強く意識してこなかった「音と文字」の関係に気付く学習や，「音」を聞いて理解したり，正しく判断したりできる，自分でも言える，という段階にある単語や文章を活字で読んでみる等の学習経験を効率的に授業内に盛り込んでいけるのではと考えています。そうすることにより，子どもたちが自ら文字への距離を詰め，読めるような気持ちになり，自分から読んでみようと前向きな姿勢になることが期待できると考えています。

下記に「読むこと」につながる音や文字に対する気づきを高めるための学習方法例をまとめてみます。

- 子どもが一息で読める５語前後の英文を，英語らしいリズムを意識し，そのリズムを楽しみながら音読する。
- 慣れ親しんだ歌・ライム・わらべ歌を活字化し，知っている音を頼りに音読したり，韻を踏んでいる部分のリズムを楽しんだりする経験をさせる。
- 遊び感覚で，慣れ親しんだ単語の一部の文字を違う文字に入れ替えたときにどのような音になり単語になるか，自分で音声化しながら試したり，正しい音を聞いて，その文字がもつ音を意識したりする。
- 活字を読んだり，音からつづりを考えたり，意味を推測したりできるクイズ形式の問題を扱う。
- 子どもが音声化できる単語や英文を必要に応じて板書して活字化して見せる。そして，書いたものを必ず子どもと一緒に音読して確かめる。
- 指導者が英語の文字を板書するときは，文字が音を表していることに子どもが気づけるように，文字の音をしっかりと発音しながら丁寧に板書する。
- 指導者がいくつか文を板書するときは，主語，動詞，目的語などの文構造が目視で気付けるように，１文ずつ改行して，揃えることを意識する。
- 単語や英文に関わるイラストと一緒に活字が提示されている脈略のある短めの文章や， 時には子どもにとって切実感のある内容のある文章を活用し，意味を理解した上で，自ら読むことに挑戦できる教材を扱う。
- 意味が理解でき，音声にも慣れ親しんだ単文を使用し，一部を替えて自分の言いたいように文を作りながら音声化したり，それを自分で読んだりする経験をさせる。
- 個人タブレットも活用しながら，児童が読みたい英語を何度もくり返し聞いたり，英語の音源をまねたりしながら，音声化する時間を授業内で確保する。

これらの学習方法の例は，すべて英語の正しい「音」の基盤が必要であると考えています。それは，文字は「音」を表す記号ですから，間違った音を正しい文字で表すことはできないからです。つまり，カタカナ発音を正しい英語のつづりでは表せないですし，その逆も真なりです。

それでは，ここに上げた学習方法例を参考にしながら，次の章では授業の流れに沿った具体的な「やり取り」と「文字指導」の案をご紹介します。

2 前後とつながる単位時間の授業づくり

現在，多くの公立小学校では，授業の始めに帯活動的に Small Talk を取り入れていることが多いのではないでしょうか。前時の復習を兼ねて，既習の語彙や表現を活用し，例えば，「What did you have for breakfast?」のようなテーマについて，ペアを入れ替えたりしながら，会話（アウトプット）をする時間を設定されている場合が多いと思います。そのペアでのやり取りでは，アイ・コンタクトやリアクション（I see. You like ～. Me, too. Great. 等）といったコミュニケーション・ストラテジーに関わる態度面の評価も含んでいることと思います。

また，How is the weather today? などのいくつかの定型文での質問なども毎授業の始めに設定している場合もあると思います。子どもたちは，くり返して練習していくなかで，徐々にいくつかの表現をスムーズに伝えたり，一部を替えたりしながら自分なりの考えで新しい文を作り，自分が上手く伝えられている，という手ごたえも感じていることでしょう。

このような成果の一面がある一方，課題も出てきているように感じています。その１つは，子ども同士のペア活動中に子どもが使用する英語の単語，表現，更に，発音や英語らしいリズムなどの部分がおざなりになっていることはないかということです。そして，態度面のフィードバックはあっても，英語そのものに対する指導者からの修正やフィードバックが適時なされているでしょうか。さらに，授業の冒頭で，子どもたちが天気や時間のことを回答するときに，本気で言葉を発しているのかどうかも気になります。

授業を始める最初の数分は，子どもたちが前の時間に学習していた算数や国語の思考の流れから，英語モードに切り替える時間，英語の授業が始まるぞという期待感が高まる時間にしたいと思っています。そこで，授業スタートの時間に，少し英語気分に切り替える短い活動を入れて，子どもたちを英語の世界に連れて行きたいと思います。

2.1 授業のはじめ10分で英語モードに　①

まず，これまでに慣れ親しんだ英語の歌から始めたいと考えている先生も多いと思います。では，英語の歌をどのように導入していくと良いでしょうか。

(1) 先生の生の声で，気持ちをこめて，アカペラで

歌を CD で聞いてみるよりも，子どもの表情，クラスの雰囲気をつかみながら，先生ご自身が一つひとつ言葉の意味と音を大切にして，丁寧に聞かせてあげてください。そのときに自然にジェスチャーが入ったり，シンプルな絵を描くこともあるでしょう。先生の気持ちを英語の歌詞に乗せて，体でリズムを取りながら聞かせてほしいと思います。

例として，「This Is the Way」を取り上げてみます。この歌は，「Let's Try! 2　Unit 4 What time is it?」の単元で使用することがよくあるのではないでしょうか。子どもの１日の朝の時間の流れを楽しく追いかけることができると思います。

授業で導入する前には，先生も数回，特徴的な発音やアクセント，リンキングの発音練習をしておきましょう。特に，wash の w や sh, face の ce までしっかり聞かせられるように意識して練習しましょう。

T：Do you know this song?
　This is the way I wash my face,
　Wash my face, wash my face,
　This is the way I wash my face,
　Everyday (So early) in the morning.

どのような音が聞こえてきたかな？

Ss：…？ウォッシュ？ウォシュレット？（笑）
T　：Listen to the song once more.
　（再度アカペラで）
Ss：face, wash my face って言ってた…。
T　：Did you hear “wash my face”？

ここで，子どもが聞き取れた wash my face の音とつづりを気づくことができるように 丁寧に板書します。そして，「wash my face のところだけ一緒に歌ってみようか」と子どもに誘いかけて，一緒に歌詞を確かめながら歌っていきます。そして，「実は２番もあるよ，３番もあるよ」と言って聞かせてみます。

今度は「違う音になっていた」と気付いてくれる子どもが出てくるのではないでしょうか。１回で全部歌わせようとするのではなく，３回，４回と機会をとらえて聞かせ，一緒に少しずつ歌えるようになっていくという成長の実感を子ども自身にも味わせていきたいです。

2.2 授業のはじめ10分で英語モードに ②

(2) 先生も英語らしいリズムを楽しんで

ここでは，ライムを扱ってみたいと思います。ライム（rhyme）とは，韻を踏んだ単語や表現が入っている英語圏で何世紀にもわたり歌い継がれてきた「わらべ歌」，ナーサリーライム (nursery rhyme) として紹介されているものです。Baa, Baa, Black Sheep も，その１つです。

Baa, baa, black sheep,
Have you any wool?
Yes, sir, yes, sir,
Three bags full;
One for the master,
And one for the dame,
And one for the little boy
who lives down the lane.

この歌の曲は，何度か聞けばすぐに曲のリズムをつかむことができます。しかし，始めから曲を聞かせないで，先生が語るように，二拍子の英語らしいリズムを体で感じながら聞かせたいところです。もし自分の英語のリズムに自信がもてないときは，出典の CD の音源を利用するのもよいと思います（出典：WeeSing, Pamela Conn Beall and Susan Hagen Nipp)。この WeeSing は，すべてのマザーグースの歌の始めに，アカペラで英語らしいリズムで語るように英語を聞かせてくれます。その部分だけで練習をしてもよいと思います。この歌にも韻を踏んでいる箇所があります（sheep/three, wool/full, dame/lane)。「似ている音がどこかにあるよ」と子どもに聞かせても良いでしょう。

２つ目に取り上げるのは，雨や台風の季節，子どもたちが楽しみにしている行事が近いときに，よく扱うライム Rain, rain, go away. です。このライムは，「Let's Try! 2　Unit 2 Let's play cards?」の単元で天気のことを扱う時に導入される場合が多いのではないでしょうか。ここでは，「Let's Try! 2」の指導書とは少し違う表現の入ったバージョンをご紹介します。

Rain, rain, go away.
Come again another day.
Little Johnny wants to play.
Rain, rain, go to Spain.
Never show your face again.

まず，気持ちを込めて英語らしいリズムで聞かせます。

T : Did you hear "rain"? How many times did you hear "rain"? Did you hear "rain" two times?
S : Five times? Six times?
T : Well, please listen once more.（再度歌う）
S : Four!!
T : Oh, did you hear "rain" four times. Did you hear the name of a country? Did you hear Japan? Did you hear Australia?（再度歌う）
S : Spain!!
T : That is right. You heard "Spain".

というように子どもの聞く視点を変えながら，何度か先生がアカペラで歌う音を聞かせてしまいます。子どもたちは，「Rain, rain, go away.」のところはすぐに覚えてしまうと思います。

このライムにも気付かせたい音の韻がたくさん含まれています (rain/Spain/again, away/day/play)。そしてgoの二重母音の /ou/ やr，lといった日本語のラ行音になりやすい音も含まれています。曲のメロディに合わせていると大切な音の連なり，リズムが体感できず，カタカナ発音が定着してしまうことにもなりかねません。授業の始めに，歌やライム等に慣れ親しむことは，英語の発音，英語らしいリズムにたっぷりと浸らせて，子どもたちに英語の音を身につけさせる時間でもあるのです。

2.3 授業のはじめ 10 分で英語モードに ③

(3) いつものルティーンに一工夫

ここでは，授業を開始するときに行うQ&Aについて取り上げてみます。中学校の授業では定番のようになっている授業はじめの質問タイムです。以下のような質問が展開されているとしましょう。

T ：Hello, everyone.
How are you today?
S1：I am tired.
T ：OK. You are tired.
What day (of the week) is it today?
Ss：It's Monday.
T ：What is the date today?
Ss：It's June 10th.
T ：How is the weather now?
Ss：It's rainy.
T ：Let's begin the lesson.

このようなやり取りをするときの子どもたちの発話は，声のトーンは気持ちがこもらず平坦な感じになり，日本語のモーラ拍（日本語のリズムの基本パターン）が入り込みやすい状態になっている場合が多いと思います。特に，カタカナの読み方で「−−」と伸ばして発音するように，rainyも「レーニー」のようになりがちです。小学生は，元気に反応してくれることが多いのですが，必要以上に大きな声で，叫ぶようにIt's Monday.「イッツマンデー」と言ってしまったり，アクセントやイントネーションがおざなりになったりしている場面に出会うことも少なくありません。このようになってしまう要因として考えられることは，授業中に英語の抑揚やリズムを意識的に感じ取ったり，そのリズムを楽しく口ずさんだりする学習経験が少なかったり，また，天気や時間について答えたりするときにも，そのことを本気で言いたいという気持ちになっていないのではないかということです。

指導者のなかには，ここは決まった単語や表現を使えればよい時間と考えていることもあると思います。しかし，授業のはじめの10分はルティーンをこなしたり復習をしたりするだけでなく，英語学習へ意識をカチッと切り替える時間でもあることを考えると，可能な限り正しい英語での「やり取り」を取り入れたいところです。

T ：Hello, everyone.
How are you today?
S1：I am tired.
T ：Are you tired? Oh, that's too bad.
Did you play tag, Onigokko?
S1：No…
T ：No, you didn't. What did you do?
S1：I play soccer.
T ：Oh, you played soccer with your friends.
I see. You belong to the soccer team.
Do you practice soccer on Sunday?
S1：Yes. Monday, Wednesday, Sunday.
T ：I see. You practice soccer on Monday, Wednesday, and Sunday.（と言いながら，丁寧に板書する。）
Everyone, what do you do after school on Monday?
など

授業の始めに時間を取り過ぎないようにしなければいけませんが，簡単な英語であっても，いつもの質問を織り交ぜて子どもの実体験や実生活に近い内容を取り上げながら，活きたSmall Talkを展開していってはどうでしょうか。真実味のある言葉の「やり取り」を通じて，子どもたちは，必要な情報を聞き取り，意味をとらえながら，やり取りに参加しようとします。そのような状況の中で使用する英語には，指導者の発話だけでなく子どもの発話にも，プロソディ（発話の声の調子）が乗りやすいと考えています。そして，そのようにして使いあった単語や表現は定着しやすいと考えています。

さらに，子どもたちが指導中の単語や文を気持ちを込めて表現した時に，対話だけで終わらせず，板書して文字の仕組みをしっかり見せて，読み合わせをし，文構造に気づかせておくことが大切だと考えています。そのことについては，次の2.4にて詳しく説明します。

2.4 授業のはじめ10分で英語モードに ④

(4) 教具の準備がいらない文字指導にチャレンジ

授業開始 10 分は，前時やその単元で身につけたい言語材料，既習の表現等の復習を兼ねて英語でQ&A，英語頭に切り替えるチャンスです。これまで「授業のはじめ 10 分で英語モードに①・②・③」でお伝えしてきたように，この授業の入口の短い時間は，日本語のリズムから英語のリズムに変えてしまう瞬間です。子どもにとって身近で意味の分かりやすい「やり取り」を英語で続けるきっかけを与えるひとときです。

早速，2.3 に続けて初期段階のやり取りで文字指導につながる活動を紹介します。

多くの教室で英語の授業を始めるときのあいさつに続く日付の確認のやり取りを例に考えてみましょう。

T ：What is the date today?
S1: July... 4!
T ：Yes, it is July.

子どもの発話を受けとめて，「July the fourth」と聞かせ，「J-u-l-y」と手元を見せながら，書くスピードに合わせて発音して板書します。書き終わったら，もう一度クラス全体で「July」と発音してみます。発話が文字になるところに注目させましょう。

Julyの発音を文字を見ながら確認したところで，Ju をゆっくり消します。子どもたちは「折角の文字が消えた，でも ly は残っている」と黒板を見つめています。そこで消したところに f を書きます。

T：Can you read this? July? No?
What is this?
Ss: あ，フライ！
T：Yes, you are right. This is ‘fly’.
Then, can you read this?

と言って，flyの前にbutterを書き加えます。子どもたちはbutter のbとtをみて「バター，あ，バタフライ」と推理します。「Yes, butterfly!」と相槌を打ってから，チョウの動きをするか，バタフライの泳ぎをするかはご自由です。続けてflyをカードなどで隠して，butterを読んで聞かせてバターに気づかせると，子どもたちはその意味を面白がると思います。

月の名前の次に，日付では曜日を確認することが多いと思います。

T：What day (of the week) is it today?
Yes, it is Monday (today).

と答えながらJulyと同じように板書します。Mを書いてから，今度は子どもたちに「What is the next letter?」と尋ねてyまで書いてMondayを確認します。そこでdayを消し「key / ey」を書き足して「monkey / money」にして，子どもに読ませます。読めなければ，読んで聞かせます。そのときにMを小文字に書き換えること，これは大事です。大文字と小文字の使い分け，月名と曜日，自分たちの名前，地名の頭文字は大文字，ということに気づかせておきましょう。

次のような単純なクイズも楽しめます。

Monday
Wednesday
Thursday

「ここにない曜日は何かな？」と問いかけてみると，子どもたちは，SundayからSaturdayまで言いながら，足りない曜日を言ってくれます。子どもたちが言う順番が間違っていても，先生が正しく発音してそれを板書すると，子どもは先生の手元を目で追いながら読んでいきます。そのときに子どもたちは板書された曜日を自力で読んだ気持ちになり，さらに足りない曜日を補っていきます。さらに，板書している曜日を使って文字と音との関係に気づかせます。MondayのMonを子どもたちにしっかり見せながら黒板消しで消し，dayのみにし，「day → say → pay → May」と発音させてみると4年生前半の子どもたちでもしっかりと子音を意識した音が出せます。最近，子どもたちに試したところ，payのところでは，あの電子決済の名前がすぐに出ました。

さらに，「What do you do on Sunday?」と尋ねて，スポーツの名前が出てくれば，baseball と板書した後，「basketball → dodgeball → volleyball」と替えていっても子どもたちは知っている ball とつくスポーツを頭の中で音として響かせながら見当をつけ，アクセントもつけて言おうとします。「あれ？ B じゃない！」と volleyball を新鮮な面持ちで見てくれることでしょう。

2.5 言語材料の定着を目指した「やり取り」例

「場面シラバス」ということばを聞いたことがあると思います。学習者が実際の場面や遭遇しそうな場面，例えば，スーパー，駅，モールのフードコート等の場面を設定する場合や，外国のことや日本のこと，週末の予定等のテーマを設定する場合もあります。学習指導要領でも，言語活動における「コミュニケーションを行う目的や場面，状況」の重要性を述べていますが，特に小学校段階の英語学習では，子どもたちが日ごろ体験し，考えていることや，最近学習した内容等を取り入れて指導すると，自ら言いたい，聞きたい，読んでみたい，書いてみたいという気持ちで英語を使いあうことができ，それが習得につながると考えています。その観点で，教科書も「場面シラバス」で各単元構成がされているものが多いと思います。

しかし，子どもたちは，設定された場面・状況の中で英語を身につけようとしていますが，この場面シラバスによる指導では，以下のことを見過ごさないようにしたいと感じています。

場面シラバスでは，場面や状況に注意が向けられ，その場面や状況で使用する語彙や表現が選ばれるので，その結果，場面ごとに単元が独立しやすくなり，子どもに習得させたい言語材料を系統的に順序だてて繰り返し使いながら定着を図ろうとする指導のチャンスが少なくなってしまうことがあるため，気をつけたいと考えています。そこで，ここからは言語材料の定着を目指したくり返しのインプットとアウトプットのある言語活動例を紹介していきます。

『Let's Try 1』で扱われている言語材料を見ると，挨拶や自分の気持ち・体調の表現，さまざまな国の名前，数・色・形，スポーツや食べ物，動物，昆虫，アルファベットの大文字などがあります。表現としては，I like / don't like～. I want～. What is this? It is～. などがさまざまな場面設定の中で使用できるようになっています。『Let's Try 2』では，I have～. や曜日や教科，校内の教室，文房具など新たな語彙，そして，アルファベットの小文字が扱われています。

【数字を扱った簡単なやり取り例】

数字は単体で扱うよりも，できるだけ数字＋名詞（複数形）を意識して聞かせていきましょう。

T ：I can see 2 students wearing a pink mask.
　Who are they?
Ss: Hana-san，Nanami-san もだ…。
T ：That's right.
　Hana-san is wearing a pink mask.
　And Nanami-san is wearing a pink mask, too.
T ：How many students are there wearing
　white masks?
Ss: 1, 2, 3....
T ：OK. Let's count them together. One,
　Two, ...
　There are fifteen students wearing a
　white mask.
　How about the number of buttons?
　How many buttons do you have?
　I have one, two, three... 12 buttons.
Ss: (自分の服についているボタンを数えている)
S1: 2 buttons.
S2: 6 buttons.
T ：Really? Let me count. One, Two, ...
　Oh, you have 8 buttons.（複数形までしっかり発音して聞かせておく）

そろそろ「数字のことを先生は扱おうとしているなぁ」と子どもたちが気づき始めているところで，さまざまな色とサイズの手芸用ポンポンがたくさん入った袋を取り出して

T : What are there in this bag?
　Taro-san, please take 5 pompons.
Taro : 5?
T : Yes, please take five pompons.
Taro :（手を袋に入れて探って，取り出す）
T : How many pompons do you have?
　Do you have five pompons?
　Let's count together. One, Two, ...,
　Six.
　You have 6 pompons.

発音を文字と合わせながら，黒板に

I have six pompons.

と板書します。「みんなで読んでみよう」と誘い，板書の一文を音読します。そして，次の子どもに移ります。ここまで一人とやり取りしますと，クラスの子ども達は，何も言わないでも手を挙げて，次は「自分がやりたい！！」と前のめりになっていることでしょう。２～３名を選んで数字をくり返し，ポンポンを取った子どもが数えて聞かせてくれたり，先生と一緒に数えたり，クラス全体で一緒に数えたりしながら，しっかりとした子音の音，アクセントを意識させて聞かせ，時には意識させて発音させてください。黒板には，

I have six pompons.
I have four pompons.
I have seven pompons.

などと文構造のレイアウトが見えるようにし，みんなで音読をします。その時に，「I」にアクセントを置かないように気をつけましょう。自然な英語のリズムで，数字のところにアクセントが来るようにして読んでください。

そして，次に２人の子どもを前に出して，

T：OK. Now you take 10 pompons together.
Ss: ???
T：For example, you take 4 pompons.
Then you take 6 pompons. Can you try?

と今度は，２人で協力して 10 個取るように指示したり，さまざまな色のポンポンが入っていますので，「何色のポンポンがほしいか」と質問して，「I want a blue pompon.」などと言わせたりして，それが取れたらご褒美として渡したこともありました。そのときは必ず，数時間に分けて全員にチャンスがまわるようにしました。

「数字がとっても上手に言えるようになったね」と一言かけてから，次のライム（マザー・グースより）を，英語らしいリズム（リンキングも含めて）で，数字にしっかりとアクセントを置き，子音の音を明確にしながら，紹介します。knock / at / the door. とブツ切れにならないよう，「knockathedoor」のような塊で聞かせましょう。可能ならば，マスクを外してしっかり口を見せて，最後の文字までしっかり発音を聞かせたいところです。

One, two, buckle my shoes.
Three, four, knock at the door.
Five, six, pick up sticks.（ks までしっかり発音）
Seven, eight, lay them straight.
Nine, ten, a big fat hen.

子どもは，数字のところは十分に聞き取れていますので，three, four の後くらいから，次の数字は five, six だなと推測しながら聞いてくれることでしょう。 また，数字以外のところが，塊で聞こえてくるため，「バコマシュー？ 変な音だなぁ」と茶化して音遊びをする子どももいるかもしれません。実は，このライムは 20 までありますので，ぜひ挑戦してみてください。

他に，「21 を言ってはダメゲーム」では，数字を 25 や 30 にして，くり返し，楽しみながら数字をアウトプットして遊んだり，Make 10 という足し算ゲームをテンポよく遊んだりできるようになると思います。

黒板に，「3 + □ = 10」などと書き，

T：Please make 10. Are you ready?
Three.
Ss: Seven.（少し間をおいて数名の子どもが言う）
あ～そういうことかぁ…。
T：Five. → Ss：Five.
T：Two. → Ss：Eight.

さらに，中学年くらいまでならば，『Good Night, Gorilla』という絵本を取り出して，「Zoo Keeper がいくつカギをもっているでしょう？青の鍵はどのオリの鍵かな？目がいくつあるかな？この目はライオンの目かな？」などと聞きながら絵本を楽しむこともできるでしょう。「数字」という言語材料を扱おうとするとそれだけを教えようとしがちです。さまざまな語彙，表現との融合により，真実味のある「ことば」のやり取りを実現させましょう。それが子どもにとって「真実味のある身近な場面や状況」となるのです。

2.6 言語材料の定着を目指した「やり取り」can / can't

ここでは，最初に，二つの資料・教材から引用した言語活動をご紹介します。どちらも can / can't の導入の際に，よく活用してきた言語活動です。

① Welcome to Wonderland　(Blue Book)　p.7, 8 より（著：久埜百合 , 1989. ㈱ ぼーぐなん）

まず, 先生が黒板に以下のフレーズを言いながら, ペンギンの絵を描きます。本来は，以下のフレーズには歌のリズムがありますが，ここでは，文字でそのリズムを表現できないため，割愛いたします。

I can walk;
I can swim;
I can swim, but I can't fly.
I can swim, but I can't fly.
How about you?

このとき，ペンギンの絵は完成していません。まだペンギンには見えない状態です。その次はカメの絵を，下のフレーズを言いながら描きます。同じくまだカメには見えない状態の絵を描きます。

I can walk;
I can run;
I can run, but I can't jump.
I can run, but I can't jump.
How about you?

ペンギンの絵に戻り

T : What is this? Can you guess?
Ss: ??　No.　お化け？
T : A ghost can fly, but this can't fly.
　Listen one more time.

ここで，再度上記のフレーズを聞かせます。先ほどの絵に少しずつヒントとなる絵を付け加えながら，徐々に絵が何かが見えてきます。子どもたちが「ペンギンかぁ，カメかぁ」と気付いたのちに，「Can it walk?　Yes. It can walk. Can it swim? Yes. It can swim. Can it fly? No. It can swim, but it can't fly.」と確認します。陸カメも同様です。この後，電子黒板に，上記の２つのフレーズを並べて，活字で見せます。

I can walk; I can swim; I can swim, but I can't fly. I can swim, but I can't fly.	I can walk; I can run; I can run, but I can't jump. I can run, but I can't jump.

T : Which is about "penguin"? Can you read?
Ss: 右じゃないか？ fly と書いてあるから。
T : Can a penguin fly?
Ss: No.
T : That's right. Penguins can't fly.
　How about a tortoise?　Can it fly?
Ss: No...　jump.
T : Ah, a tortoise can jump? Or a tortoise
　can't jump?
Ss: A tortoise can't jump.

ここで，みんなで音読をします。一度しっかり聞かせて，その後に先生のまねをして，音読していくようにします。やり取りから can / can't の意味を理解しています。自分でも音声化できるようになったところで，dolphin の絵を見せて，どこの単語を何に変えるとよいか考えさせます。そこで先生が電子黒板に示されている文を活用して，子どもたちには，dolphin になったつもりで，返答させます。

T : I can walk.　→　Ss : No. I can't walk.
T : I can run.　→　Ss : No. I can't run.
T : I can swim. →　Ss : Yes. I can swim.

「frogはどうかな？」と違う動物で試させてもいいです。慣れてきたところで，「自分たちで動物を選んで，その動物になったつもりで can / can't の文を作ってみよう」と誘い作らせてみます。このように，元になる文のどこをどのように替えたいかを自分で考えさせて自分で音声化させると，次はそれらを「書く」ことへ繋げることができると思います。

② 語研ブックレット３　小学校英語１　p.59 より（一般財団法人　語学教育研究所）

黒板に，以下のように線を引きます。

		?	?	?	?
swim	○	○	×	×	○
walk	×	○	×	○	○
run	×	○	×	○	○
jump	○	○	×	○	×
fly	×	×	○	×	○

左列の枠外には，swim, walk, run, jump, fly と発音しながら，必要に応じてジェスチャーを入れてもよいが，①の言語活動からの流れであれば必要ないでしょう。

いくつかの動物の絵を準備しておく。その動物は，上に挙げている動詞から連想しやすい動物や子どもがすでに音として知っている動物から選んでおく。その動物の中から１つ選び，左上に貼る。例えば，カエル。

T : It can swim. It can't walk. It can't run,
but it can jump. It can't fly.

と言いながら，○・×を表に書き入れる。子どもたちが○・×を見ながら，can と can't の音の違いに気付いてくれるように，○を書きながら It can swim. と合わせて発音する。２つ目の動物からは，絵を見せないで入れ，カエルのときと同じように It can swim. 等伝えながら○・×を入れていきます。この時点で，子どもたちは，「どのような動物だろうか」と色々とイメージを膨らませていることでしょう。ここで，用意しておいた動物の絵を見せます。もし活字を読むことに慣れてきている段階の学習集団ならば，文字のみを見せます。

butterfly, penguin, rabbit, duck, elephant

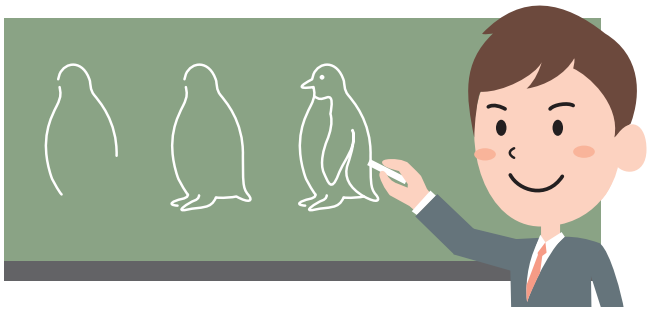
上の表の「？」に入る動物はどれでしょうか。皆さんも考えてみてください。ここで以下のようなやり取りが考えられます。

T : What animal comes here in this blank?
It can swim. It can walk. It can run and jump.
But it can't fly. What is this?
Ss: Penguin?
T : OK. Let's check it together.
Can a penguin swim? → Yes.
Can a penguin walk? → Yes.
Can a penguin run? → ?? Yes.
Can a penguin jump? →見たことある。Yes.
Can a penguin fly? → No.
That is right. This is "a penguin".

このようにして，次の動物も確認していきます。最後に，elephant が残ります。「では，elephant を表す文をみんなで作ってみよう」と誘います。子どもたちが迷うところは，「elephant は泳げるの？」ということ。YouTube などにも泳いでいる動画がありますので，そのような動画を見せることも良いかもしれません。その後，みんなで elephant について文を作りながら，先生は板書をしていきます。そのときもこれまでにも説明したように，語順が明確に見えるようにレイアウトします。そして，文字を書くときは，先生の発音を合わせてください。子どもの注意を引きながら，時には子どもの方に目線を送って，板書するようにしたいところです。

この後は，子どもたちがしっかりと自分で音読できるかどうか確認し，自分で自信をもって音読できるようになった英文のみを英語のノート（4 線 10 段）や 4 線のあるワークシートに転記させます。中には，すべての文を書いたり，他の動物のことまで自分で書き始める子どもが出てきたりします。中には，1 文のみを書いて満足する子どももいます。

ここで紹介した①と②の言語活動は，子どもとの「やり取り」をしながら，can / can't を使った S+can+V の文構造のみを扱っています。ここから，前置詞の学習をするときには，in the sea (water), in the sky, on the ground, などの表現も入れながらやり取りの表現を膨らませていきたいところです。



2.7 言語材料の定着を目指「やり取り」過去時制

過去形は，６年生の夏休み明けに扱われている場合が多いと思います。「What did you do during the summer vacation? Did you enjoy it?」と質問しあうやり取りがイメージしやすく，子どもたちも何らかの思い出があり，話す話題があるであろうという期待が含まれているからかもしれません。しかし，さまざまな個人や家庭の事情により，周りの仲間が体験したような楽しい時間を過ごすことができなかった子どもたちも少なからず存在する可能性があります。学級や子どもの実態をしっかり把握したうえで配慮して扱いたい内容です。

【今日の時間割を活用して】

もし皆さんの英語の授業の前に，子どもたちが他の教科担任制の授業（算数や理科，体育，音楽など）や休み時間等であった場合，以下のようなやり取りから英語の授業がスタートできます。

T : Hello, everyone!
T : What did you have/study before this class?
Did you have math? Oh, you had P.E.
What did you do in the P.E class?
Ss: Volleyball.
T : Oh, you played volleyball.

と発音しながらその文を板書します。

T : You have P.E. tomorrow.
Do you play volleyball again?

と投げかけ，上で板書した played の ed を消します。もし昼休みに「バスケットしたよ」と言う子どもがいれば，play を再度 played に戻して板書します。

You played volleyball.
You played basketball.（ball の位置を揃えて）

次に，時間割の黒板を指さしながら

T : Did you learn a new kanji character in Japanese class? What is it?
Ss: 脳
T : Brain? Can you write it?

このように，時間的に近い過去の経験を取り上げてみましょう。やり取りをしながら，黒板には，

I played volleyball.
I learned Kanji.

などと，子どもが発話した内容も板書していきましょう。そしてこれまで同様に，板書した文を音読し次の話題に入ります。

【How are you? I am hungry. と子どもが答えたら】

挨拶のやり取りの中で，子どもたちが I am hungry. と答えたら，ここは過去形なども含めて表現を広げるチャンスです。

T : How are you today?
Ss : I am hungry.
T : Um?? Who is hungry now?
S1: Yes. I am hungry.
T : Did you have breakfast this morning?
S1: Yes.
T : Did you have natto on rice?
S1: No. Rice, miso-soup, egg, sausage, yogurt, ...
T : Wow, you had a lot. But you are still hungry.

ここで，

I had rice.
I had miso-soup.
I had an egg.
I had a sausage.

と発音し文頭を揃えて板書し

T : Did you have one sausage? Two sausages?

と聞き，「３本食べた」というような複数形の回答ならば，「I had a sausage. と書かれている文のどこを替えますか？」と聞き，子どもに考えさせます。

S1: I had three sausage.
T : OK. I had three sausages.

と言い直して複数形の存在を提示します。子どもの中から，「なぜ s が付くのか?」と質問がきたら，複数形について少し説明を日本語で行って良いと思います。

【給食の献立表を活用して】

今度は，例えば午前中に英語の時間がある場合には，朝食のやり取りからの流れで，「今日の給食の献立は？」と繋げられます。

T : This is our Kyushoku menu in June.
What do we have today?
We have rice, fried chicken, soup, and yogurt.
What did we have for lunch yesterday?
Do you remember what we had?
T : We had fish. And…

と子どもが言うよりも先に一文書きながら伝えて，次からも文で言うように促していきます。

Ss : We had soup and mapo-dofu.

と黒板にある文の単語を自分で入れ換えさせます。先生の読みのリピートではなく，子どもたちに自分から言わせるために，少しサポートを入れます。そして，子どもたちの英語のリズムを再度正しく修正するためにも，皆で音読をします。

2.8 既習の学習を活かした読み物教材

子どもが正しい「音」を得るときに，一緒に文字も添えてあり，自分の発話した英語が活字となって見えてくると，活字を読もうとするときに自分がもっている正しい「音」が頼りになります。「音」と「文字」は決して別々に学ばれていくものではありません。意味のある豊かな「やり取り」の中に，意図的にも文字を散りばめておき，さまざまな学習を通して文字の存在，文字がもつ音に意識を向けさせていく。そうやって，子どもがもっている「音」を受信するアンテナの感度を高めていくことでしょう。

ここからは，すでに知っている音のある単語や表現を含んだ，子どもにとって知りたい，読んでみたいと思える文脈のある投げ込み文章を紹介します。対象は高学年です。「小学生に英語の文を読ませることはできるか？」と疑問を抱くかもしれません。ここでのねらいは，子どもたち自身が今まで学んできたことを土台に，英語の活字があふれている状況であっても，「何が書いてあるのかな」と活字に向かい合い，読めそうな単語を探したり，正しくなくとも音声化しようと試みたりしながら自分も英語を「読めるようになってきている」という気持ちにさせることです。そのような気持ちにさせる第一歩目は，やはり子どもが「何だろう？」と興味・関心を寄せ，前のめりになることが大切だと思います。

Look! What is that?
It is very big.
Is that a UFO?
It has two eyes. No!!
They are not eyes.
They are windows.
The leaf is on the top.
What color is it?
It is green.
What is this? Do you give up?
Well, it is a public toilet.
It is in Mikkabi city in Shizuoka.

上の画像を電子黒板で見せながら，簡単なやり取りを口頭で行い，次に配布する文章の大枠の意味を「やり取り」からつかませておく。その後，文章を配布します。

T : Please look at this photo.
What is this? Can you guess?
It is very big. Is this a mikan?
I can see a dog. The mikan is much bigger.
Do you want to eat it?
Ss: No!!
T : What is it? Can you guess?（文章を配布）
Ss: あっ！トイレって書いてあるよ。
T : Is it a toilet? Where is the word “toilet”?
T : Where is it? Is it in Tokyo? No.
Ss: Mikkabi, Shizuoka
T : That is right. It is in Mikkabi, Shizuoka.

大きさや色，場所，用途等の情報をやり取りしながら確認し，先生の後にまねて読み，一緒に音読して，文章の中で単語や文の正しい音にたくさん触れさせましょう。

3 地域で採択された小学校用教科書の特徴

参考例：啓林館Blue Skyの特徴

教科化になって初めての教科書採択から２年半が経ちました。現在の中学１年生は，小学校５年・６年の２年間，教科として教科書を基盤に英語を学習した経験があります。そのような学習歴のある中学１年生を担当する中学校の英語科の先生は，子どもたちのなかにどのような変化をつかんでいますか。「中１の始めからよく話すようにはなった」「簡単な単語ならば，どんどん読んでいる子どもが増えた」とか，「アルファベットの書き方から教え直さなくてはならない」等，さまざまでしょう。小・中学校連携の観点から，中学校側も小学校側も双方の教科書を手に取り，それぞれの教科書の特徴を把握し，目の前にいる子どもたちがどのような英語を学習し，身につけているか，そして学び続けるのか，共通理解を図ることが必須の課題だろうと思います。

そこで，本項目３では，啓林館 小学校外国語科用教科書『Blue Sky 5, 6』を取り上げ，小学校側から，教科書の特徴を見ていくことにより，本資料のテーマでもあるさまざまな「やり取り」と「文字指導」の可能性について考えてみたいと思います。

3.1 ７種類の教科書から選ばれた教科書

教科書採択が検討されていたとき，７社の教科書が並んでいました。そのなかで，啓林館の『Blue Sky 5, 6』は，唯一表紙に写真が使用されていました。教科書の表紙は，これから学ぶ英語と世界とのつながり，そして，子どもたちの世界観の広がりを感じさせる入口です。

感じさせる入口です。

その表紙を１枚めくると，「もくじ」があります。皆さんは，この「もくじ」を見て何に気付きますか。

学習指導要領の移行期に使用されていた『We Can!』や他の教科書と大きく違う点が私の目に飛び込んできました。それは，各単元のテーマや身につけさせたい言語材料が，肯定文で記載されているという点です。

多くの教科書は，「What can you do? Where are you from? What is your best memory?」など wh 疑問文が記載されています。さらに，５年生の単元ごとの言語材料を「もくじ」から見てみると，「I am ～ . You are ～」の be 動詞を使用した表現から，一般動詞のさまざまな種類が登場し SVO の文構造を学ぶ。そして，can の助動詞や sometimes などの副詞を学習する。そして，「This is ～ .」と人称の変化と be 動詞の変化に触れながら，「I want to ～ .」と不定詞を目的語にした SVO の表現を学ぶ。肯定文から入って，疑問文，否定文，そのあとに wh 疑問文へ学びが変化していきます。

小学校段階では，これらの文に意味のある文脈を通して慣れ親しませながら意味理解を深めていくので，明示的な説明はしません。むしろ，英語の「音の流れ」を聞いて，その意味を理解し応答しあう間に，文の構造に気づきそのルールを身につけていきます。６年生になったとき，p.8, 9 をみて，「あ，そういうことか！」と子どもは気づくでしょう。

教科書の単元構成が「子どもの『ことば』の学び順になっているかどうか」は，子どもの学びの定着を支えるものになると考えています。中学校の教科書の作り方はそれに近いのではないでしょうか。

p.4, 5 では，3・4 年生で学んできたアルファベットの「文字と音」で遊ぶことができるページが準備されています。その遊び方については，p.14 から紹介いたします。

この２ページでは，アルファベットの名前の音から，単語の中でもつ「文字が表す音」をさまざまな絵と共に紹介しています。「音と文字」の関係を遊びながら気づかせて，音韻認識能力を高めていく大事な見開きページです。

また各単元をのぞいてみると，以下のような特徴にも気づきます。

- ▶英語の意味をイラストで理解させ，日本語での説明が少ないので，書かせる問題でも，英語の思考が継続しやすい単位時間の流れになっている。
- ▶日本語での説明が比較的少なくシンプルである。
- ▶６年生で扱う「過去時制」が，夏休みや日常の経験，学校行事の思い出と Unit4，5，6 と３つの単元にわたり紹介されており，子どもの既知の動詞を規則動詞と不規則動詞に分類し，身近な場面・状況で活用できるような英語表現が提案されている。
- ▶「Listen and Do」の問題では，先生と子どもとの間で，簡単な「やり取り」がうまれやすい。ここの言語活動については，次のページにて紹介します。
- ▶単元最初の見開きのページ（パノラマ）にあるイラストと共にターゲットとなる文や単語が明記されているので，どの英語表現を使って「やり取り」すればよいかが子どもにもイメージしやすい。
- ▶他社の教科書のなかでも，比較的ページ数が少なく，かつ設定されている言語活動の量に無理がないと思われる。そのため，子どもの習熟に合わせて，独自の言語活動や副教材を取り入れやすい。
- ▶巻末のカードのなかには，単語だけでなく SVO 程度の単文で示されているものもあり，活字を通して文構造に触れることができるよう工夫されている。
- ▶教科書全体を通して，子どもたちに読ませる文字や文が少ない。特に，５年生の教科書には Chant のコーナー以外では，英文が示されているところはかなり限定的である。
- ▶子どもたちが「聞いてみたい」「読んでみたい」と思うようなお話や内容の英文が記載されていない。
- ▶子どもたちが「歌ってみたい」「英語の音が面白い」といった気持ちになれるような歌やライム等が紹介されていない。

3.2 Blue Sky 5, 6 の特徴を活かした言語活動例

「音韻認識能力」とは，単語のそれぞれの文字がもつ音の単位（音素）の連なり（音韻）の音が理解できたり，単語を音韻で分解（例えば cat を c / at ）して音声化したりする力のことを言います。つまり，音の構造が理解できる力です。日本語を母語とする私たちは，モーラ拍という単位で日本語の単語を分解し，一部の文字を入れ替えると，異なる音や意味になることを理解しています。例えば，デスクは「デ・ス・ク」の３音節だとわかります。しかし，英語の音韻認識は，日本語のようにはいきません。「desk」は１音節で成り立っています。特に英語の音のインプット量に限りのある日本人の英語学習者にとっては，英語らしい音の成り立ちをさまざまな意味のある文脈の中で学習することが必要になります。多くの研究でも示されていますが，この「音韻認識能力」が後の英語を「読むこと」と深く関係していくことになります。このような理由からも，導入編（pp.3-6）のライムの紹介，展開編（pp.7-12）において音韻認識能力が高まると考えられる文字指導例をお伝えしてきました。

では，p.4 を活用して音信認識能力を高める簡単な言語活動例を考えてみたいと思います。

① 「つられちゃダメ」ゲーム

1)先生は，黒字の部分だけを発音していきます。子どもたちは，正しい「音」を補いながら，正しい単語の音を出します。先生の音につられないように。

T : -iger　→ Ss : tiger
T : -abbit　→ Ss : rabbit
T : -iano　→ Ss : piano

まずは，確実に子どもたちが足りない頭音を補うことが明確で，反応しやすい単語から取り扱いましょう。いきなり，at と言っても，cat や hat にはつながり難く，迷いが出てしまい，思い切って音を声に出すことをためらってしまいます。徐々にテンポが出てきて，脱落している音が分かると，それを補って単語を強く発音しますから，子音の音の発音矯正にもなります。補う頭音が強く発話され，足りない音を意識するようになります。

2)今度は，頭音を別の子音で発音して聞かせ，正しい音で言い直すというゲームです。わざと違う子音を発音して楽しむことで，子音の発音がしっかりします。直して発話していき，異なる音を正しい音に入れ替えていくことで，音と文字を意識させます。文字を変えることで変な音になってしまうことを楽しみながら音と文字の関係に触れていきます。

T : liger /　これはどう発音するかな？
Ss: /lAigər/??
T : That's right. 正しい発音は？
Ss: tiger /tAigər/　では間違いは直してね。
T : pabbit /pAbit/　→ Ss : rabbit /rAbit/
T : biano /biAnou/　→ Ss : piano /piAnou/

3)子どもが十分に正しい発音ができるようになった単語を先生が発音しながら，文字と音とを合わせるようにして板書し「文字あそび」に移行します。

② 「文字あそび」

○○の音から始まる単語を知っていますか。

T : Can you find the words starting with /b/ ?
Ss: bear, banana... box, boy, blue....
T : (その中から１つだけ単語を取り上げ板書し)
bear → pear → wear → year
(１つの子音から２重の子音を入れたり)
spear → speak → sport → heliport → passport....
(頭音だけでなく他の部分の音も取り上げる)

このように，子どもが初めての音であっても，文字がもつ音から推測して音声化していく経験をたくさん積ませていきましょう。そのときにさまざまな単語にも触れられ語彙量を増やすことにもつながると考えています。このような文字と文字が示す音とその複雑さについては，音を先に正しく身につけることで子どもたちは乗り越えていきます。その逆に，音の入り方が不十分のまま，かつ音と文字の関係性に気付かないまま中学校の英語学習を開始することにより，文字に対する苦手意識を感じてしまう子どもが出てくるのではないかと危惧しています。

これらの「音と文字」の関係に気付かせる言語活動は，Blue Sky 5, 6 のいくつかの単元の終わりに「Let's Read and Write」のページで位置付けてあります。それらのページでも，①や②のように少しゲーム化して文字と遊びながら進めていただきたいと思います。

③ 扉ページでの「やり取り」と「文字指導」

Blue Sky の扉ページは，とても「やり取り」のイメージが生まれやすいイラスト，内容であると思います。ここで紹介するのは，「Blue Sky 5　Unit 7　Where's the park?」の最初の両ページです。in / on / under の前置詞のある文を使って，子どもとやり取りしながら，英語らしい語順のインプットを音と文字の両方で行っていくことができます。

T : Can you find the frog? Where is it?
Ss: 椅子の上に座っている。スープ飲んでるよ!!
T : Where is the frog? Is it on the chair?
Ss: Yes.
T : Ah, yes. The frog is on the chair.
How about the cat? Can you find the cat?

It is the black cat. Where is the cat?
Ss: カバンの中だよ。
T：OK. Let me see... Yes. The cat is in the bag.

このようなやり取りからスタートすると，子どもたちは隠れている動物を探したくなって，どんどん勝手に探したくなり，「〇〇はどこにいる」とか「〇〇のお尻だけが見える」とか探すことに夢中になるでしょう。このときには，あまりこちらが意図するインプットが入り難いように感じるかもしれません。しかし，辛抱強く子どもが日本語で言ったことも，「The monkey is under the cushions.」と英語で返していきます。ある程度，動物たちの居場所が出揃い，少し子どもたちの興奮もさめて落ち着いてきたところで，

T：(先生は黙って，以下の英文を板書します。)
The (　　) is on the piano.
Ss: (子どもたちは，先生は何を書いているのかなと見ています。)

すぐに読み始めようとする子どもと，piano のところだけ見つけてどのような意味を聞こうとしているのか推測する子どもも出てくることでしょう。そして，先生から「What animal comes in this blank? The pig is on the piano? No!! The teddy bear is on the piano?」と投げかけると bird だけを言う子ども，そして，板書の文を参考にして「The (bird) is on the piano.」と文で答えようとする子どもが出てきます。そのときの子どもの発話が英語らしいリズムになっているか確認し，そうでなければ，一緒に音読をして英語らしい音調で音声化します。そして，次の文を書き始めます。これをいくつかの動物で試した後に，

T：(先生は黙って，以下の英文を板書します。)
The monkey is on the table.
Ss: えっ？テーブルの上にはサルはいないよ。
T：What do you see on the table?
Do you see cookies on the table?
Ss: (色々なものが出る。) Banana.
T：How many bananas do you see on the table?
Ss: Two banana.
T：Two bananas are on the table.

と言って，先ほどの文の下に発音しながら板書します。

The cat is in the bag.
The bird is on the piano.
Two bananas are on the table.

このような「やり取り」とそこで展開されるターゲットになる表現をくり返し聞かせ，子どもの発話を励ましながら，黒板で活字でも見せていきます。もしここで，子どもたちの中から，「is ではなくて are なのか，bananas と s があるのはなぜか」と質問がきたら，上の文と比較して「何か法則が見つかるかな？」と問い返してもいいです。子どもなりに理由付けをしてきたことを必ず受け止めてください。子どもの様子から説明が必要と思われたら，簡単に日本語で説明してあげてください。

④ Let's Read and Write から活用する

『Blue Sky 5, 6』には，「Let's Read and Write」という「音と文字」の関係に気付きを促すような「読むこと・書くこと」のページが系統的に設定されています。

Blue Sky 6 p.51 Let's Read and Write 2 の 1 の単語

ten, violin, watch, six, yes, zoo
table, vest, water, fox, yen, zebra

T：Can you read these words?
(最後の子音までしっかりまねさせる)
T：黒で書かれたところだけ読むよ。よく聞いてね。
en, iolin, atch, ix, es, oo, able, est ..... ebra
変な音ですね。音が足りないね。
音を補って言ってみよう。順番はバラバラだよ。
ebra → zebra, able → table, ater → water

子どもたちは，足りない音を自分で意識して補おうとするため，その部分の音を意識して明確に発話されます。つまり，子どもが自分で知っている音を頼りに音声化しながら，文字がもつ「音」に意識を向けていきます。

まとめと謝辞

私が小学校の英語教育の世界に初めて飛び込んだのは，2004年でした。そのころは，すでにさまざまな地域で研究開発が進んでおり，それらの研究開発校においては，教科書や決まった教材がないなかで，独自のプログラムを作成したり，副教材を作成したり，新しい英語指導法を試したりしながら，学校全体が一丸となって子どもたちの英語の学びに向き合っていました。私が小・中学校の兼務専科教員として所属した小・中学校は，英語教育を通じて連携を深め，PTAも巻き込んで9年間一貫した英語教育に取り組んでいました。当時は，まだまだ小学校段階の英語の授業で文字を扱うことは推奨されておらず，ある程度英語の音に慣れ親しんだ高学年において，アルファベットの文字を見せ，文字の形と音を確認する程度でした。しかし，ある日1年生の担任の先生が，「子どもたちにアルファベットの文字で遊ばせてもいいですか？」と質問されました。私は答えに困り，とっさに「まだ1年生は英語の音にも慣れていませんし，アルファベットの文字を見せるのは少し早いかもしれません」と伝えた記憶があります。ところが，次の日1年生の教室前の廊下に，アルファベットの大文字・小文字のマグネットがたくさん入った箱とホワイトボードが置いてあり，1年生の数名の子どもたちが，その周りでマグネットの文字を手に取ってはホワイトボードにどんどん貼っていました。すると，ある子どもが何かを意図しながら文字を探して，選んで貼っていることに気がつきました。選んでいたのは大文字だったり小文字だったりと統一性はありませんでしたが，ホワイトボードに貼られたのは，家で飼っている大好きな犬の名前でした。きっとお家の方がローマ字で名前を書いていて見せていたのかもしれません。それをまねて並べようとしているようでした。犬の名前の日本語音を，ローマ字つづりの全体像の記憶をたどりながら，自分が正しいと思うアルファベットの文字を探していたのです。文字への抵抗感などまったくなく，アルファベット文字のマグネットで遊んでしまう1年生の子どもたちの姿を目の当たりにした経験により，「文字の存在意味」と「文字との付き合い方」を考え直す原点となったのではないかと振り返っています。本資料の執筆にあたり多大なご尽力を賜った久埜百合先生（中部学院大学学事顧問）は，さまざまな書籍や資料のなかで，「NHK」や「HB」や「OK」といったアルファベットの文字を読めない小学生はいないだろうと言及されています。子どもたちの身の回りには英語の文字があふれていますが，それらを始めから認識できたわけではなく，何度も「音と文字」がつながる学習経験をしていくことにより，自ら既知の音を頼りにしながら並んでいる文字を見て，声に出してみたり，自分で言い直してみたりして文字を読もうとしていきます。その音と文字のつらなりが，やがて単語となり，句となり文となっていき，意味理解を伴った読みができるようになっていくのではないでしょうか。

最近，知り合いの中学校の先生より，中学校1年生の初期段階で見せる単語の「つづり間違い」を見せていただく機会がありました。その誤答の傾向を見ると，「明らかにローマ字読みのつづりになっている」，または「聞き覚えた音を頼りに書こうとして一部つづりがまちがっている」の2通りがほとんどでした。中学校の英語学習においては，「読んだり」「書いたり」する学習活動が多くなります。そのときに，「正しい音」への気づきを高めてきた子どもは始めはつづり間違いはあっても「正しい音」が基盤にあるため，早い段階で適切な文字を認識するようになり，徐々に正しいつづりへと修正されていきます。初めて英語の音に触れあう小学校段階において，将来の英語学習の基盤となる「正しい音」に十分に触れておくこと，そして自分でも真似たり発話したりしながら，音と文字との関係に敏感である子どもたちに育てておくことは大変重要であると考えています。

最後になりましたが，久埜百合先生とはいつも子どもの「ことば」の学び方，発達段階に沿った文字指導のあり方を基盤に言語活動例を具体的にご相談することができ，英語指導の基本的な考えを整理整頓しながら最後までたどりつくことができました。また，編集に関わり，アドバイスをいただきました編集部の関係のみなさまにも，この場を借りて感謝申し上げます。

MEMO

小学校英語

中学校英語につなぐ「読むこと」の土台を作る「やり取り」の指導

知が啓く。
啓林館

本　　社	〒543-0052	大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	Tel 06-6779-1531
東京支社	〒113-0023	東京都文京区向丘2丁目3番10号	Tel 03-3814-2151
北海道支社	〒060-0062	札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階	Tel 011-271-2022
東海支社	〒460-0002	名古屋市中区丸の内1丁目15番20号ie丸の内ビルディング1階	Tel 052-231-0125
広島支社	〒732-0052	広島市東区光町1丁目7番11号 広島CDビル5F	Tel 082-261-7246
九州支社	〒810-0022	福岡市中央区薬院1丁目5番6号 ハイヒルズビル5F	Tel 092-725-6677

https://www.shinko-keirin.co.jp/　小学校英語 教授用資料　2022年10月